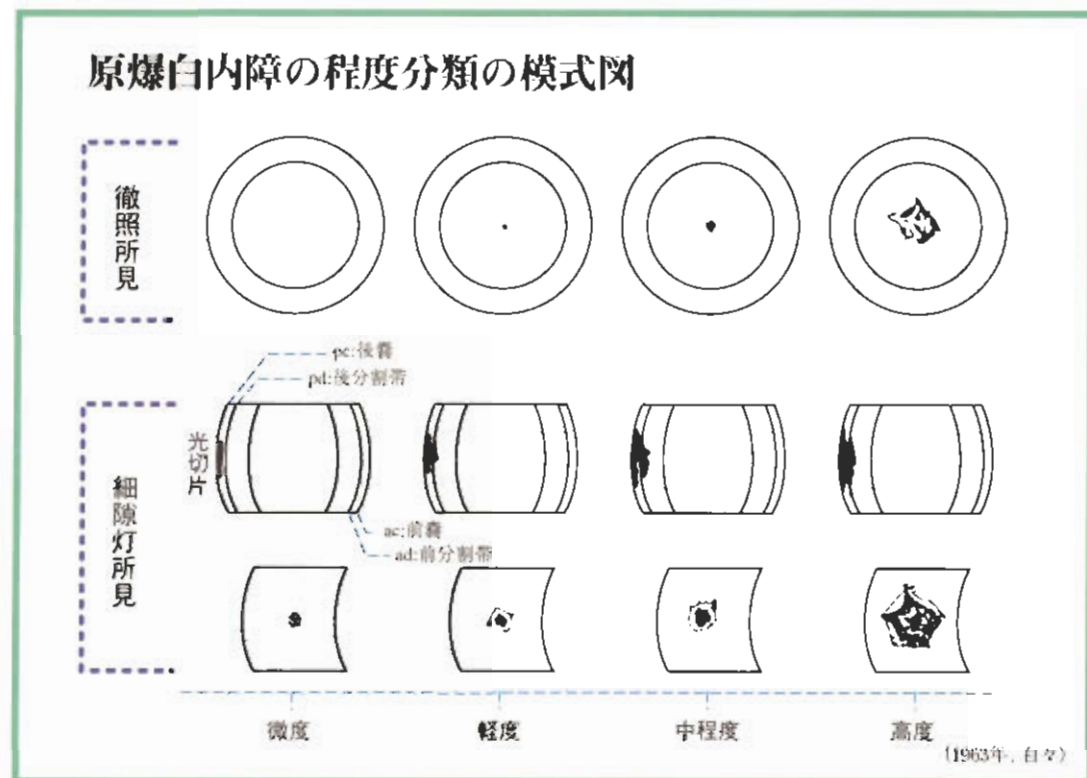


## 4 眼科的疾患

原爆白内障の程度分類の模式図



### 白内障

原爆白内障の臨床像は、他の放射線によって生じた白内障と類似している。すなわち、混濁は水晶体の後極部で後囊下に初発し、斑点状ないし円盤状混濁を形成し、一部は拡大してドーナツ状となる。二枚貝様の混濁を形成することもある。これを細隙灯顕微鏡でみると、混濁の表面は顆粒状で、多色性反射(色閃光)がみられることがある。

原爆白内障の程度は、微度から高度までの4段階に分けられる。視力障害を自覚す

るものは高度のものである。老人性白内障などでも類似の所見を呈することもあって鑑別が必要である。

原爆白内障の発生頻度と混濁の程度は、被曝線量と関連しており、被曝後数カ月から数年して発症がみられたが、重症例は早く発症し、軽症例の潜伏期は遷延した。

被曝距離との関連では、近距離ほど発生頻度が高く、原爆白内障の起こる被曝距離の限界は1.6~1.8kmと考えられている。また、被曝線量に基づく統計的解析では、閾値は0.6~1.5Gyと推定されている。

予後は、停滞性のもの、進行性のもの、減弱するものなどさまざまである。